

さかなかな

2026 夏

Vol.130



名古屋港水族館

特集

海洋ごみ清掃はいろいろなことを語りかけてくれます

- 水族館トピックス
- 水族館アカデミー ダーウィンの箱
- ほねほね探検隊
- ボランティア便り
私の館内おすすめポイント
- 水族館スクールレポート
- アクアリウム・ダイアリー

海洋ごみ清掃は いろいろなことを語りかけてくれます

学習交流課 吉井 誠

砂浜を散歩すると、足元にはヒトが出したごみ、いわゆる**海洋ごみ（おもにプラスチック製品：海洋プラスチックごみ）**が必ずといっていいほど落ちています。いまはそれが日常風景です。私は仕事から、普段ヒトが入れないところ、ヒトから離れた海岸に行く機会は多いです。藪をかき分けて進んだ先にも、山を越えて降り立った人里遠く離れた海岸にもご多分に漏れず海洋ごみが待っています。

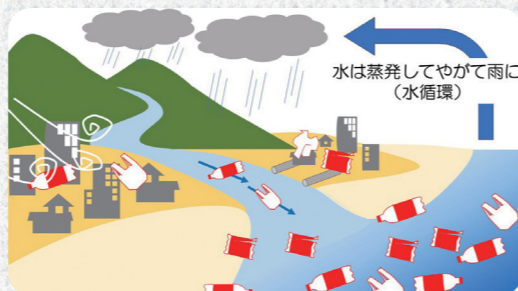
これらのごみはほとんどが陸上由来です。街（陸）のごみは雨水に流され川に流れ込み旅をしてやがて海に辿り着き「海洋ごみ」と呼ばれます。海水は蒸発して再び雨になりますが（水循環）、ごみは蒸発することなく海に留まり続けます。ごみのゴールは海なのです。地球規模で考えると、「海は地球のごみ箱」といっても過言ではないのです。

当館では環境教育の一環として、SDGs（持続可能な開発目標）の「海の豊かさを守ろう」という目標について、水族（生き物）と海洋ごみの現状を通してお知らせする展示ルーム（「エコ・アクアリウム」）を設けました。常設展示としては日本の水族館としては初めてのことでした。

また、日本水族館協会（JAA）では、海洋ごみの現状を清掃を通して知ってもらうことを目標のひとつに掲げました。そこでそれに賛同する当館でも「**海洋ごみ清掃イベント**」を実施することにしました。昨年秋が第1回、この春が2回目となります。



河口に茂るヨシ原をかき分けて進むと、大量のごみが漂着しています。ここまでヒトが来ることはまずないでしょう。



水循環のイメージ図。海に流れてきた水は蒸発して再び陸上に雨となり降り注ぐ。水によって海まで運ばれたごみはそこに留まり続け「海洋ごみ」と呼ばれる。



清掃風景。海洋ごみは一見何もないように見えるが、石積み防波堤の隙間には際限なくある。30分程度で準備したごみ袋はいっぱいになる。後方の建物は名古屋港水族館、鯨類メインプールのスタジアム観客席。

清掃場所は水族館西側の石積み海岸です。「ヒトが作り出したごみ」を回収します。みなさん、手には日本水族館協会からいただいた軍手（漁網由来原料使用）をはめ、左手にはやはりいただいたごみ袋、右手には武器となる火ばさみをもって開始です。

みなさんが回収するごみのほとんどはやはりプラスチック製品です。ペットボトル、ポリ袋、食品トレーの切れはし、あるいはサンダル・・・それぞれのごみ袋がみるみる膨らんでいきます。

また、途中で飲み物の提供も行いましたが、ペットボトルではなく、紙コップで提供しました。我々がまずできることは「**必要でないプラスチック製品は使わない（3R（※）のリデュース）**」が大切と伝えます。

そのあと参加された方には水族館ならではの、水族と海洋ごみについてのレクチャーを聞いてもらいます。今回は清掃場所の近くでも観察することができるウミガメ、それをとりまく環境についてです。清掃後ということもあり、自分事として目からうろこが落ちた方も多かったと思います。

このイベントで目の前の海洋ごみが回収できたことは事実ですが、とてもじゃありませんが無くすることはできません。それよりも参加されたみなさんに海洋ごみの現実を見てもらう、そして自分の体を動かして実際に海洋ごみの回収を行う、それらがどこから来て海を漂っているのか気づいてもらう、それらと海で暮らす水族の関係に思いを巡らしてもらう・・・。

『海洋ごみのことは動画で見たり本で読んだりして知っているつもりでした。ですが、やっぱり自分で動いて自分の目で見るとは本当に大切なんだとあらためて実感しました。』

『まずは自分が変わらないといけないと思いますができれば一人でも多く意識してほしいと思います。まずは周りの人から伝えていきます。』

『私も今までポイ捨てをした事があるが、絶対に今後はポイ捨てをしないと決めました。』

『海から離れて生活していても無関係ではないとあらためて感じました。』

『海洋ごみが発生しない為にはどうすればよいか考えるきっかけとなり、参加してよかったです。』



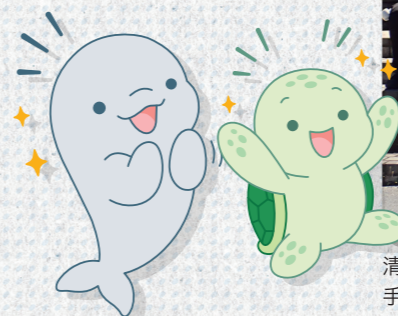
死亡して海岸に打ち上げられていたウミガメ（オサガメ）1頭の消化器官から見つかった石油化学製品（プラスチック）。これが原因で死亡したかどうかは不明。



イベント後みなさんにアンケートを書いていただきました。以下に一部をご紹介します。

『海から離れて生活していても無関係ではないとあらためて感じました。』

『海から離れて生活していても無関係ではないとあらためて感じました。』



清掃後参加者みなさんと記念撮影。手前が集めた海洋ごみ、ほとんどが石油化学製品（プラスチック）。

等々、私たちの思いが伝わったイベントになったのではないかと思います。

海の生き物を飼育展示している水族館がそれを踏まえたくて行うイベントは、参加する人が受けるインパクトも強いようです。私たちではなく、参加者が拾う海洋ごみひとつひとつが雄弁に語りかけているように感じました。

※3R：ごみを減らすための、「Reduce=リデュース（発生抑制）」「Reuse=リユース（再使用）」「Recycle=リサイクル（再生利用）」の3つの頭文字。リデュースはごみの低減に直接つながるため、3Rのなかでも最も効果の高い活動といわれています。

ケープペンギンを搬出しました



芝生の上を歩くケープペンギン。南館で飼育している南極のペンギンたちとは異なり、アフリカ南部に生息する温暖な地域のペンギンとして紹介してきました。ペンギンは南極だけでなく、さまざまな地域にいらしていることを伝えてくれました。

将来的には野生個体群の存続も懸念されており、国内外で保全に向けた取り組みが進められています。

今回の移動により、新たな群れの中で個体同士の関係性が広がり、将来の繁殖につながることも期待されています。当館では、これからもさまざまな生物の保全につながる取り組みに貢献していきます。

名古屋港水族館では、ブリーディングローン(繁殖を目的とした動物の賃借)契約の終了に伴い、2026年4月をもってケープペンギンの飼育を終了しました。4月14日に3羽を恩賜上野動物園へ、4月23日に19羽を神戸どうぶつ王国へ移動しました。当館でのケープペンギンの飼育は2017年に始まり、飼育期間中には4羽が誕生しました。これらの取り組みを通して、本種の保全や繁殖管理に関する知見を蓄積することができました。

現在、ケープペンギンは野生で個体数が減少しており、国際自然保護連合(IUCN)のレッドリストでは最も絶滅危険度の高い「CR(深刻な危機)」に分類されています。

飼育展示三課 材津 陽介

季節展「春の黄色い花の彩り ヤマブキハゼ」を開催しました



同じ巣穴に同居しているヤマブキハゼとニシキテッポウエビ

春の季節展で、今回は「ヤマブキハゼ」を展示しました。ヤマブキハゼは温かい海に生息するハゼの仲間。白い身体に名前の由来となった山吹色の斑点があることが特徴の美しいハゼです。また、テッポウエビの仲間と共生することでも知られるため、ニシキテッポウエビも同居させて展示を行いました。

黄色いヤマブキの花のような斑点を多くの方にご覧いただけたことだと思いますが、実はヤマブキハゼもニシキテッポウエビもちょとしたことで驚いて、砂に掘った巣穴へ隠れてしまう習性があります。しかし、今回は水槽の環境によく慣れたのか、餌をよく食べ、砂の上にいる時間も増えて、じっくり観察することができました。

なにかあるとすぐに隠れる巣穴はニシキテッポウエビが掘ったものを利用することが多かったのですが、ニシキテッポウエビがあちこち掘り進めるので毎日水槽内のレイアウトが変わっていました。小さな体に秘められたパワーも感じることができました。

飼育展示一課 大島 由貴

今年も開催！「環境学習 名古屋港スナメリかんさつツアー」

3月25、26日に「名古屋港水族館×JERA 環境学習 名古屋港スナメリかんさつツアー」を実施しました。広報パートナーである株式会社JERAと当館による共同開催として今回は2期目となります。昨年は名古屋港内を周遊するルートで航行しましたが、今年は直近の調査でスナメリがよく発見された場所を参考にして、鍋田ふ頭を目指すルートを設定しました。それが功を奏したのか全4回のツアーで昨年よりも多くの参加者がスナメリを見ることができました。(2日間で89名に参加いただき、両日合わせて31頭のスナメリを観察しました。)



かんさつツアーでは参加者のみなさんと船のデッキからスナメリを探しました。



リニューアルした北館2階の発見コーナー。名古屋港の生き物調査を紹介しています。

また、今年も発見コーナーがパワーアップ。「名古屋港のフィールドノート」と題して名古屋港水族館が取り組んでいる身近な生き物の調査について紹介しています。私の一押しはスナメリを実際に観察している気分になれる「のぞいてみよう」のコーナー。双眼鏡を模した穴をのぞくと、まるで自分が調査員になったかのようにスナメリを見ることができます。ぜひ体験してみてくださいね。

飼育展示第二課 宮嶋 桃子

水族館トピックス 2026 夏

根室海峡でのシャチ調査に参加してきました。



悠々と泳ぐオスのシャチ

2026年5月11日から15日にかけて、根室海峡にて北海道シャチ研究大学連合(Uni-HORP)によるシャチ調査が実施され、京都大学野生動物研究センターより調査への参加機会や費用のご支援をいただき、参加することができました。

本調査は大学の研究者や学生を中心に実施され、目視およびドローンによる観察を通じて分布の把握と行動観察を行うとともに、個体識別のための写真撮影や鳴音の録音および呼気の回収を行いました。なお、呼気は遺伝子解析のための試料として活用されます。調査期間中にはシャチを毎日発見することができ、多い日には60頭ほどのシャチを発見することができました。さらにシャチだけでなく、マッコウクジラ、ナガスクジラ、ザトウクジラ、イシイルカ、カマイルカ、クロツチクジラ、キタオットセイといった多様な海棲哺乳類も観察できました。また、当館で予備実験を行っている遺伝子解析のための呼気回収や鳴音の録音を、野生のフィールドで行う貴重な現場も見学することができ、水族館での実験が野生のシャチの調査・研究に深く貢献している現場を肌で感じることができました。野生のフィールドで得た感動と貴重な経験をこれからの水族館の飼育と展示に活かし、皆さんにお伝えしていきたいと思ひます。

飼育展示第二課 福本 洋平

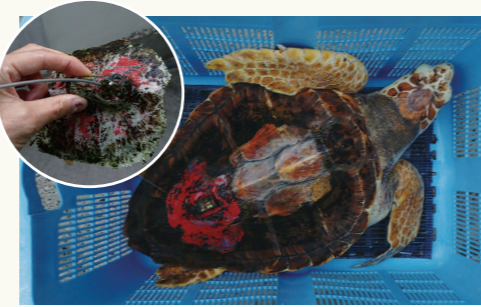


甲羅の送信機が脱落するまで

飼育展示一課 森 昌範

● 名古屋港水族館が取り組むアカウミガメの回遊経路調査

名古屋港水族館は大海原で暮らすアカウミガメの謎に包まれた回遊生態を解明するための調査を海外の研究機関と共同で長年にわたり行っています。その調査方法は名古屋港水族館で育てたアカウミガメの甲羅に位置情報を発信する送信機を取り付けて放流し、その後の回遊を人工衛星を介して追跡するというもので、送信機から定期的に届く位置情報をつなげると一筆書きの線となってウミガメの回遊経路が可視化できるというわけです。これまでに北太平洋に300頭以上のアカウミガメを放流して調査を行ってきた結果、アカウミガメが好む水温帯や、主に分布する海域、季節的な移動など、あまり知られていなかったアカウミガメの回遊生態の一端が明らかになってきています。



脱落したときのアカウミガメ(個体番号5333)と脱落した送信機

● 甲羅に装着する送信機

この調査で重要な役割を果たす「送信機」はガラス繊維生地と樹脂を用いて簡単には外れないように甲羅に接着します。長く甲羅に付いていればそれだけ長期間の追跡が可能となるので調査の効果が高まりますが、そのことがウミガメの成長や健康を阻害することは避けなければなりません。接着面は甲羅の成長に伴ってやがて辺縁から少しずつはがれていき、最終的には送信機ごと脱落しますが、実際にはどの程度成長すると外れるのでしょうか。



① 甲羅に装着する送信機



② 送信機をガラス繊維生地で覆って樹脂で塗り固める



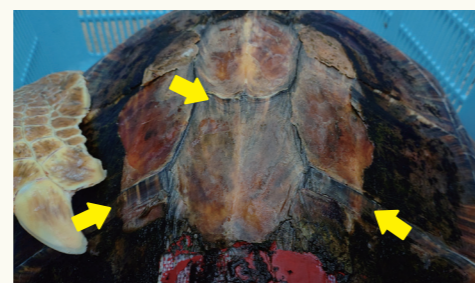
③ 送信機の装着が完了した様子

● 飼育個体でのモニタリングを実施

この疑問を解消するために実際の装着方法と同じ手法で模擬の送信機を甲羅に接着したアカウミガメを水槽で飼育し、脱落までの過程をモニタリングしました。具体的には月に1回のプロポーション測定と写真撮影による経過観察です。

その結果、装着から567日で送信機が自然に脱落したことが確認されました。その間の成長は直甲長(甲羅の長さ)が30cmから46cmになりましたが、甲羅の変形や異常は見られなかったことからこの装着方法が成長を阻害しないことも明らかになりました。

今回のモニタリングで得られた結果は、今後の回遊経路調査における装着方法や追跡期間の検討に有用な知見となるはずです。



樹脂で覆われていた部分の甲羅も正常な成長が確認できる(矢印)

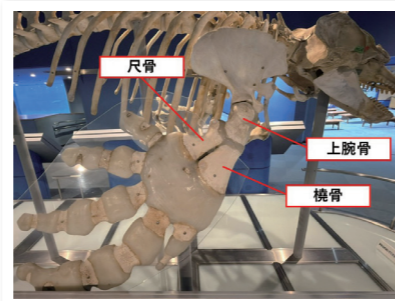
ほわほわ探検隊

胸鰭の中には・・・

飼育展示二課 横田 匠他

鯨類の胸鰭は外見こそ魚類の鰭に似ていますが、その内部には上腕骨や橈骨、尺骨、指の骨などが並び、陸上哺乳類の前肢と同じ作りをしています。これは水中生活に適応する過程で形態が大きく変化しても、哺乳類に共通する骨格が保たれていることを示しています。このような共通性は、鯨類が陸上の哺乳類から進化したことを示す手がかりとなります。

鯨類の胸鰭には人でいう腕から5本の指までの骨が含まれています。



ボランティア便り 私の館内おすすめポイント Volunteer News

北館2階 進化の海

ボランティア 榎本 照弥



化石のレプリカを通して鯨の進化の様子がよくわかります

「大昔、クジラの祖先は陸上を4本足で歩いていたんだって、驚いたなー!」北館「進化のコーナー」では5300万年前のクジラの祖先「パキケタス」の標本のほか順次進化してきた「アンブロケタス」「ジゴリーザ」の標本が観られます。鼻の位置の移動、後足の退化など生活環境に応じた進化の様子がよくわかります。標本の横には「クジラの進化」の様子がよくわかる立体映像が放映されています。5300万年前の時代にタイムスリップしてクジラの祖先にお会いしましょう。

水族館スクールレポート School Report

「南極・昭和基地ライブトーク!2026」を開催しました 学習交流課 松田 乾

4月18日(土)、昨年に引き続き、名古屋港水族館南館2階のシネマ館にて「南極・昭和基地ライブトーク!2026」を開催しました。継続開催となる今回は、61組107名の方にご参加いただきました。

イベントでは、南極・昭和基地と全国4か所の博物館を中継で結び、第67次南極地域観測隊越冬隊が現地での活動や生活の様子をライブで紹介しました。事前に選ばれた参加者3名が昭和基地の隊員に直接質問する場面もあり、越冬隊員の生の声を聞くことができました。



昭和基地との生中継を行いました



トークセッションでは来場者からの質問に南極でのエピソードを交えてお答えしました

中継後のトークセッションでは、展示生物の採集のため、サウスシェトランド諸島キングジョージ島にあるチリの基地をこれまでに3度訪れた栗田館長と、第65次隊員で水族館の飼育係である松田が登壇しました。参加者から寄せられた質問にできる限り答えながら、南極での体験や裏話を交えて語り、会場は大いに盛り上がりました。また、サテライト会場として使用された「ふじ」食堂でも中継映像が上映され、立ち止まって見入る来場者の姿が多く見られました。継続開催による認知の広がりも感じられ、アンケート結果からは高い満足度がうかがえ、イベントは好評のうちに幕を閉じました。

アクアリウム・ダイアリー

2026年3月～2026年5月

催し物

- 3月7日 水族館de ホワイトデーモーニング
3月24日～5月6日 春をテーマにした季節展「ヤマブキハゼ」
3月25日、26日 名古屋港水族館×JERA 環境学習 スナメリかんさつツアー
5月30日 名古屋港で海洋ごみ清掃～清掃でみえてくること～

【水族館スクール“もっと知りたい!ダーウィン教室”】

- 3月8日 「体力勝負!?イルカのトレーナー体験」 参加者4組14名
5月24日 「大接近! ベルーガ飼育の舞台裏」 参加者6組15名



ヤマブキハゼ

生物の出来事

- 3月27日 黒潮大水槽にマイワシ搬入15000匹
4月23日 ケープペンギン搬入



来訪者

- 3月17日 名古屋シーライフ水族館 小川泰史 館長
4月3日 ブラバ大学付属水族館(タイ)の方4名
4月3日 金沢大学 長尾秀美 教授
5月30日 WAZA会長 David Field 氏 (エジンバラ動物園 園長)
WAZA個体群管理委員長 Dolf DeJong 氏 (トロント動物園 園長)

講演・その他出来事

【講演など】

- 3月4日、5日 中部ブロック獣医師研究会(石川動物園) (参加:小谷由佳子)
3月6日 JAZA 理事会 (出席:栗田正徳)
3月7日、8日 スナメリフェスティバル@神戸
ポスター発表
「名古屋港スナメリプロジェクト」(宮嶋桃子)
3月9日、10日 JAA第6回水族館研究会(日比谷図書文化館) (参加:小林清重)
3月22日 名古屋市動植物実態調査に係る
専門家会合令和7年度第2回会議及び
なごや生物多様性シンポジウム2026
(出席:中嶋清徳)
3月27日 JAAトレーニングトーク(オンライン)
(参加:横田匠他)
4月10日 JAA理事会 (出席:栗田正徳)
4月14日～15日 JAZA生物多様性委員会(恩賜上野動物園)
(出席:栗田正徳)
4月21日 JAZA共同研究
ペンギン類の動物福祉に配慮した
適正な飼育施設基準の策定報告会
および研究計画会議(出席:大島由貴)
4月23日～24日 JAZA中部ブロック園館長会議
(出席:栗田正徳)
4月30日 JAZA 理事会 (出席:栗田正徳)
5月10日～16日 シャチ生息地調査(於:根室海峡)
(参加:福本洋平)
5月14日 JAZA 理事会 (出席:栗田正徳)
5月17日～19日 JAZA年次総会 (出席:栗田正徳)

【職場訪問・水族館レクチャー(オンライン含む)】

17件 1,457人

編集後記

今号より編集委員を務めることになりました。これまでは依頼を受けて記事を執筆する立場でしたが、編集に携わるようになり、水族館全体の出来事に目を配りながら、さまざまな分野の記事をバランスよくお届けすることの大切さを感じました。紙面を通じて、名古屋港水族館の魅力や日々の取り組みをより身近に感じていただけるよう発信していきたいと思っております。今後の「さかなかな」もぜひお楽しみください。

(松田)

表紙写真

【シャチ】

学名: *Orcinus orca*

根室海峡で行われたシャチの調査に参加しました。ここ羅臼では街から見えるほど近くを、野生のシャチが悠々と泳いでいました。

ニューズレター さかなかな Vol.130 2026年 夏
発行/公益財団法人 名古屋みなと振興財団 名古屋港水族館
〒455-0033 名古屋港区港町1番3号 TEL.052-654-7080
URL <https://nagoyaaqua.jp>
本誌の掲載記事、写真等の無断複写・複製転載を禁じます。

WEBサイト
<https://nagoyaaqua.jp>
(なお、一部の機種でご覧いただけない場合があります)

